松村文芳先生のご退職に寄せて

温　　琳

松村先生の下へ

2005 年 3 月、私は大東文化大学外国語学研究科中国言語文化学専攻の修士課程を修了しました。当時、大東文化大学中国言語文化学専攻には博士課程がなかったことに加え、日本に来て 4 年まだ一度も中国には帰っておらず、郷愁の想いが募っていたこともあり、修士課程修了というキリの良いところで中国に帰国して就職しようとほぼ決めていました。

しかし、迷いが全くなかったというわけではありません。なぜ迷ったかというと、せっかく日本に来て修士課程を修了し、博士課程にも進んで学んでみたいという思いが心のどこかにずっとあったからです。このことを修士時代の指導教官に話してみたところ、神奈川大学には博士課程があり、面白い研究をやっている先生がいるから受験してみたらどうかと勧めてくれました。そこで初めて松村先生のことを知りました。

そして、入学試験の面接で初めて松村先生にお会いしました。修士課程でやってきた研究と松村先生がやってらっしゃる形式意味論とはあまり関連性がなく、非常に緊張しました。実際、面接試験で何を聞かれたかはほとんど記憶になく、面接試験の最後に松村先生が優しい目で私を見ながら、これからしっかりとやれば良いと言ってくださったことが今でも印象に残っています。松村先生の院生になったのは、博士課程で学べることに魅力を感じていたのも事実ですが、何より「今まで関連する研究をやってこなかったとしても大丈夫、きみを引き受けきちんと指導する」と言っているかのような、松村先生の優しい目に引かれたからです。

忘れられない授業

無事、博士課程に進学し、3 年間の勉強・研究生活が始まりました。松村先生の講義は毎週火曜日 16:20 からでした。講義内容が面白すぎて、3 年間一度も定時に終わったことがありませんでした。そのおかげで、私は専門知識以外のものも得ることができました。この意外な収穫については後ほど触れます。

特に２年次の時は、博士課程に在籍している松村先生の院生が私一人だけだったので、講義はマンツーマンでした。講義内容は専門のものが大半を占めていましたが、時には中国語の用例などから脱線することもありました。一番印象深かったのが毛沢東とレタスでした。

中国語の用例に毛沢東の名前が出た際、松村先生が毛沢東は才能のある人だ、またその才能に増して大の策略家だとおっしゃいました。私はこの言葉に大きな衝撃を受けました。私の生まれ育った環境では、一般の人が毛沢東を評価する言葉を口にすることがタブーとされているからです。しかし、松村先生のこの何気ない一言がまるで暗闇の中に射す一筋の光のように、私がそのタブーについて考える契機となりました。その日からあらゆることについて自分で考える力が身についたように思います。

どういう経緯でレタスの話になったかは忘れましたが、内容についてはしっかり覚えています。レタスを良く買うが、すぐだめになってしまうというような話を松村先生に言った記憶があります。私はなんらかの答えを期待したわけではないのですが、松村先生は目を輝かせて熱心にレタス保存法を伝授してくださいました。レタスを買ったら、すぐに一枚ずつはがし、水洗いをした後、ラップで包み野菜室へとのことでした。まさかという思いで、松村先生の方法を実践してみたところ、本当にレタスが丸ごと冷蔵庫に入れた時と比べて倍以上日持ちしました。これにも松村先生はなんでもご存知なのですね、とまた大きな衝撃を受けました。レタスの保存に関しては、今も松村先生が教えてくれた方法を使っています。そして、これからも使い続けるでしょう。

人生の指南役

初めての帰国

神奈川大学に入り、松村先生の下で勉強することが決まった時、日本に来てすでに５年が経っていましたが、私はまだ一度も中国に帰国していませんでした。今思えば、５年も実家に帰らないというのはやはり少し普通ではないというか、少し変かもしれませんが、当時は博士課程での勉強や将来への不安などから、とても実家に帰ることを考える余裕がありませんでした。博士課程２年の夏ごろ、やはり講義の中でのことだったと思いますが、中国に留学に行っている学部生の精神衛生上の問題が話題になったことがあります。その話の流れで最近実家に帰っていますかと松村先生に

聞かれました。いいえ、日本に来てまだ一度も帰っていませんと答えると、今度は松村先生が驚かれたようで、しばらく絶句されたのを覚えています。それから、1年に1度は帰国して親に顔を見せてあげなさいと何度もアドバイスしてくださいました。そして、松村先生に背中を押されるような形で、6年ぶり中国の実家に帰りました。

恋愛相談

上述した忘れられない授業の部分で、松村先生のおかげで専門知識以外のものを得ることができたと書きました。ここではそのことについて述べます。当時、講義が延び、終わるのが午後7時前後になることが多くありました。そういったとき、指導教官は異なりますが、同期の宮本くんと学食で、または大学の近所にあるレストランで良く一緒に夕食を食べました。そして、ある日告白されました。少し慌てました。彼とは知り合ってまだ日も浅く、正直まだ人柄がよく分からなかったからです。周りで相談できる人と考えたら、松村先生しかいないと思い、先生に相談に乗っていただきました。宮本くんは神奈川大学の外国語学部を卒業して、大学院に進学した学生だったので、先生は学部生時代から知っている宮本くんのことを真面目な好青年だと教えてくださいました。そして、現在、宮本くんはわが夫となりました。

推薦状の謎

2008年3月、博士課程を修了しました。それと同時に、日本の大学で中国語の教員になるための就職活動もスタートしました。応募書類を作成するにあたって、推薦状が必要な場合もしばしばあります。松村先生に推薦状をお願いすると、いつも快諾してくださいました。そして、松村先生の推薦状を応募書類に同封すると、私は何故か必ず面接に呼ばれました。今の職場に関しては、やはり推薦状を同封したところ、面接に呼ばれ、無事に就職までできたのです。とても謎でした。一体何が書かれているのかと推薦状の内容を覗き見たくなったこともありました。今の職場の新人歓迎会でようやくその謎が解けました。面接官の一人で上司にあたる方が、きみはあの松村先生の教え子なのだから、問題はなかろうと面接委員会が考えたのだと教えてくださいました。松村先生は中国語学界ではとても著名な方なのだと身をもって理解しました。そして、私に今があるのがすべて

松村先生のおかげとも痛感しました。

お詫び＆感謝

博士課程に在籍した３年間、松村先生はたくさんのことを教えてくださいました。しかし、松村先生の教えをすべて忠実に実行できたとは言い難いです。よそ見せずに今の研究に専念しなさい、学会では積極的に発表しなさい、英語能力をもっと磨きなさいといった、先生からの貴重なアドバイスが実行できませんでした。先生の研究室へ行き、貴重なお時間を私のくだらないお詫びに使うわけにはいかないため、ここに記させていただきます。

本当に申し訳ありませんでした。

松村先生とは院生時代だけではなく、博士課程修了後も最新研究の動向、授業の進め方、職場の悩みなど、たくさん相談に乗っていただきました。その都度、松村先生は適切な解決法を教えてくださいました。松村先生には感謝しきれないほど助けていただきました。今の私があるのはすべて先生のおかげだと心から思っています。

本当にありがとうございました。

松村先生、これからも人生の師として色々ご教授ください。